



“諦めること”

—仏教に学ぶ災難をのがるる妙法—

文

政 11 年(1828)11 月 12 日越後の三条を中心に大地震が起きた。甚大な被害、沢山の死者がでたという。良寛さんはこの時 71 歳。良寛さんと親しみをこめて呼ぶが、彼は大愚良寛といい、曹洞宗の偉い禅僧である。同時に歌人であり、書家でもあった。

地震の後、良寛さんは山田杜^{とこう}臯という人に宛てて、みずからの無事を報じた書信(手紙)を出している。

「地震は信に大変に候。野僧草庵ハ何事なく、親るい中、死人もなく、めで度存候。しかし、災難に逢時節には、災難に逢がよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるる妙法にて候。」(ちょっと難しいですね)

災難に遭ったとき、わたしたちはたいてい蜘蛛の巣に引っかかった虫のごとくに、じたばたともがき苦しむ。じたばたしたってどうにもならぬことを知りつつ、しかもなおかつじたばたせざるを得ないのである。そこに凡人の愚かさがある。

災難にあえば、災難を災難とあきらめて受けとめ、そして無心でいればよい。災難のなかで、あれこれ思いわずらうことをやめよ…というのが、先の手紙に見られる良寛さんの教えなのであろう……。

仏

教において、自分の思い通りにならないもの、つまり「生・老・病・死」を「苦」と捉えています。

「苦」というのは自分の思い通りにならないものをいいます。思い通りにならないものを自分の思い通りにしようとするところから「苦」が生じます。

仏教では、**思い通りにならないものを、これは思い通りにならないものだ**

と諦めるように…と教えています。その明らめが「諦」です。つまり、「諦」

とは断念する事ではなしに、真実を明らめることなのです。災難であろうが

病気であろうが、人生の様々なことは、自分がなんとかできるものと、できないもの

があります。**自分では何ともできないことは、それらを受容し、それと共に**

生きればよい。仏教はそのように教えています。コロナ禍のさなか、何かのヒント

となるかもしれません。

裏面へつづく

はい
こうか
↓ ”乞暇の拝”

これからよろしく おねがいします

同じく ”乞暇の拝” ・ 僧堂



↑ 送行の時に、まずは代々のご住職様のお位牌をお祀りしている開山堂でお拝をします。真剣な面持ちで、今までのことに思いを馳せながら…。

10/30 に岩手県・正法寺にて修行中の長男・滉基が送行してまいりました。1年6か月の期間でしたが、この経験をこれからの檀務に生かして参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。



春洞寺・矩崇さんと滉基

← 一緒に修行を終えた小泊村の春洞寺さんと旅支度をして。これから、このいでたちのままお山を後にしました。足元は裸足にわらじ。



皆様お世話になりました！



正法寺山主
盛田正孝老師

→ 役寮さんと記念写真。向かって左前列の方が正法寺山主・盛田正孝老師です。いろんな事があった修行生活でしたが、皆様に支えられて乗り越えることができました。ありがとうございました。

編集後記

息子が送行し、また家族が揃いにぎやかな日々となった。そして今回の「諦める」のテーマは息子とのたわいもない話から思い立ったものだった。

「福山諦法」というお名前の禅師様がいらっしゃる。「諦」の字は負のイメージを持つ言葉と思っていたので、名前につかうのはどうしてだろうと不思議に思っていた。

息子は「諦めるは明らめる、つまりは明らかにするっていう意味なんだよ」と教えてくれた。(なんだ良い言葉なんだ、知らなかった！)

西洋ではウィルスは徹底的に戦うものと捉え、東洋では共存するものと捉えるのだそうだ。自分では何ともできないことを受け入れ共に生きよ、と仏教では教えているということも、この度知った。色々な考え方があるのだな。考えさせられた。息子よありがとう。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

合掌